

方便法身としての法蔵菩薩と名号

本もと川かわ光こう定じょう

(高田学会)

宗祖の親筆とされている十字名号と八字名号の裏書に「方便法身尊号」と誌されていることは衆知の通りであるが、このことよってアミダの名号は単なる名号ではなくて、方便法身の尊号であるということが教えられるのである。方便とは言うまでもなく十波羅蜜行の一つにあげられている菩薩の修行内容である。即ち衆生救済の為に完全な手段方法として方便波羅蜜があげられている。なお方便なる語の意味として梵語ウパーヤは、一如法性が人間に理解されるように人間に近づいている意がある。方便は顕浄土の働きなのである。宗祖親筆の名号といわれる六幅中四幅が十字尊号で名号の最後に如来という言葉で表現されている。仏という表現ではなく如来という表現を用いられている。真如としての仏、覚体としての仏という感覚を受ける仏という表現に対して、如来は如ヨリ来生セルモノとしての仏、即ち我ら衆生に呼びつづける活動の相を感じさせられるのである。

『一念多念証文』に「方便ト申スハ形ヲアラハン御名ヲ示シテ衆生ニ知ラシメタマフヲ申スナリ」とあり、形と名で真実を衆生に知らせんと顕現されたのである。また『自然法爾の御書』にも「弥陀仏ハ自然ノヤウヲ知ラセンレウ

ナリ」とある。衆生に知らしめん為に方便の形をとって顕現されたアミダ如来が方便法身ということである。

さて、尽十方無碍光如来は一如より形を現わした方便法身であり、報身如来であるとされつつも『唯信鈔文意』に「光ノ御形ニテ、色モマシマサズ形モマシマサズ。即チ法性法身ニ同ジクシテ無明ノ闇ヲハラヒ悪業ニサヘラレズ、コノ故ニ無碍光ト申スナリ」と示されている。一如から顕現した如来を表わすのに光でされている。光もひとつの形ではあるが、それは形のないものの形である。光は我らの肉眼の対象となるような光線をいうのではない。固定して実体化する人間の分別固執を離れさせるアミダの智慧の働きを光で知らされたのである。我らは相対的分別の言葉の世界にあるものであって、すべてのことを相対的分別にしか窺い知ることができない。それ故に分別を超えた一如の顕現体を表わすのも、相対的分別の言葉で無碍光如来とか不可思議光如来というように表現されている。しかしそれは相対的なものを否定した形の言葉で表現されているのである。智慧光仏という言葉には、わが身の無明の闇の深さがかわっているのである。単に智慧光仏という仏名をあげているのではない。相対分別でしか語られない、生きられない無明の痛みをかかえての名である。仏名は衆生とかかわっている名で、それが形なき形で示されているのである。自己とのかかわりに於いて、自己否定をとるところにこの世に顕現したもうた方便法身・報身をもう一度「光ノ御形ニテ、色モマシマサズ」と真如一如そのものにかえされているのである。ために、形なき形の表現をもって顕現されたのである。方便はあくまでも顕浄土真実のためにあることが窺えるのである。

宗祖はアミダ如来の本国は、一如宝海とも法性のみやことも称せられている安養浄土であるが『証文類』には、衆生が浄土往生して開くところの証果を滅度の異名として、常楽 寂滅 無上涅槃 無為法身 実相 法性 真如 一如等の名をあげられているが、それは我ら衆生の相対的分別を超えた真実純粹の世界である。一応、静止の覚体の状態と窺えるのである。『唯信鈔文意』には「法性法身ト申スハ色モ形モマシマサズ シカレバココロモ及バズ言葉モ

タエタリ」とあり「浄土高僧和讃」には「安養浄土ノ莊嚴ハ 唯仏与仏ノ知見ナリ」とうたわれている世界である。ではどのようにして虚仮不実の我ら衆生がこの一如真実に遇えるのかというと、先にあげた滅度の転積の最後の一如をうけて、「然レバ弥陀如来ハヨリ来生シテ」と一如が如来として顕現してくるのである。ここに一如の活動性が窺えるのである。

『一念多念証文』には「一実真如ト申スハ無上涅槃ナリ、涅槃スナハチ法性ナリ、法性スナハチ如来ナリ」と真如は如来なりと転釈されている。その真如は単なる理念ではないことをつづいて示されている。すなわち「宝海ト申スハ、ヨロヅノ衆生ヲ嫌ハズ障リナク隔テナク導キタマフヲ大海ノ水ノヘダテナキニ譬ヘタマヘルナリ」と示されていることが知られるのである。如来は、我ら衆生を対象的に見られているのではない。衆生を嫌わず障りなく隔てなくとは、如来の向う側に对象的に衆生を見られているのではない。功德宝海の中に衆生の全体があり、また如来の全体があるのである。『唯信鈔文意』には「コノ如来微塵世界ニミチミチタマヘリ スナハチ一切群生海ノココロナリ」とあって、尽十方無碍光如来は十方に満ちている。尽十方無碍光如来、不可思議光仏は智慧となり、光明となって十方に満ちている。智慧となり、光明となるということは、本願による撰取不捨の働きを表わしたものであり、十方に無辺際に存在していることを表わしているのである。法蔵菩薩の重誓は「名声聞十方」とある。名声十方に聞こえんとあるのである。一如には声はないが声なき一如の声として名号のことを名声と表現されているのである。語りかけて衆生を呼び覚ます意義があると窺えるのである。『行文類』に「大行トハ無碍光如来ノミ名ヲ称スルナリ」とある。無碍光如来の名、即ち南無阿弥陀仏ではなく、「大行トハ無碍光如来ノ名ヲ称スル」とあるのである。ここに如来の名とは、単に対象としての阿弥陀仏ではなくて、動的な我ら衆生への呼びかけの名であるといえるのである。その名を聞くところに我ら衆生の南無が生まれるのである。方便法身としての名号というのは、名号が一如真実の働きを顕

現していることを意味しているのと窺うのである。

『大経』上巻前半には、国王であつた法蔵菩薩が世自在王如来の説法により無上正真道の意を発し、法蔵菩薩と名のり、建立した誓願を五劫に思惟し、四十八の本願を選択せられ、不可思議兆載永劫の修行を積んで本願成就して、十劫の古えに成仏したまい、光明無量の仏果を得られ、十二の光明を放つて十方国土を照らし、その光に遇う人びとに限りない安らぎを与えていると説かれていたのである。つまり、アミダ仏がアミダ仏に成るまでの菩薩の位、法蔵菩薩における求道の在りさまが語られているが、法蔵菩薩は一如より顕現したもうた方便法身と窺うのである。

宗祖は『一念多念証文』に「一如宝海ヨリカタチアラハシテ 法蔵菩薩トナリタマヒテ云々」といわれ、いわゆる従果向因の菩薩として顕現されたのが法蔵菩薩である。

『大経意』和讃には「南無不可思議光仏 饒王仏ノミモトニテ」とか「弥陀成仏ノコノカタハ」という表現をしておられるのは、それを裏づけられているものと窺えるのである。すなわち法蔵菩薩を直ちに南無不可思議光仏とか弥陀と讃嘆せられているのである。『教文類』には、大経の大意を述べられるところで「弥陀、誓ヲ超発シテ広ク法蔵ヲ開キ、凡小ヲ哀ンデ選ンデ功德ノ宝ヲ施スコトヲ致ス」とある。単なる菩薩の発願、修行ではない。如来の発願であり、如来の行である。『信文類』には「光明寺ノ和尚ノ云ハク 此ノ雜毒ノ行ヲ廻シテ 彼ノ仏ノ淨土ニ求生セント欲スル者ハ、此レ必ず不可ナリ。何ヲ以テノ故ニ、正シク彼ノ阿弥陀仏因中ニ菩薩ノ行ヲ行ジタマヒシ時、乃至一念一刹那モ、三業ノ所修、皆是レ真実心ノ中ニ作シタマヘルニ由リテナリ」(散善義)とある。菩薩の行は如来の真実心の働きである。この働きによって、人間のまことは実は雜毒の行でしかない機の問題を語られているのではないか。法蔵菩薩は五劫思惟によって、本願念仏を選択され、ここに我ら衆生の救済される道が完成されたのである。ここに五劫とあるのは、単なる世間的時間をいっているのではなく、いわば宗教的時間というべきものである。法蔵菩薩

の我ら衆生にかけられる真実心の深広の時間をさすのではないか。また十劫成仏の十劫も共に我ら衆生とかかわった宗教的時間であると窺うのである。しかも法蔵菩薩の修行については、不可思議兆載永劫というように限定した時間の数を用いずして、永劫と表現されている。五劫思惟によって本願念仏を選択され、アミダの成仏も十劫の古えにできていても、法蔵菩薩の修行が不可思議兆載永劫と表現されているのは何を語っているのか。我ら衆生の現実のすがた、即ち虚仮不実、雑毒の善を以ってしては成就できない機の問題が語られているのではないか。この我ら衆生のために如来の本願が衆生の上に成就するまでは働きつづけられていると窺うのである。ここに法蔵菩薩の面目がある。一切の衆生に法蔵を開く。かぎりなく開くはたらきの名が法蔵菩薩である。名号も法蔵菩薩も一如、本願の顕現、即ち方便法身として、常に我ら衆生の上に躍動されていると窺うのである。